

# 『トリストアン』における矛盾語法についての一考察

小林 英 信

## (I)

トーマス・マンは、初期の短篇作品において、独特な形容詞の使い方をしている。しばしば、一個の名詞に対して、その意味内容が相互に対立し矛盾する二個の形容詞を並列して付すとか、あるいはまた一個の名詞に対して、その名詞の意味内容と対立し矛盾するような意味内容を持つ一個の形容詞を付すということを行っているのである。このような表現法は、いわゆる修辞学で矛盾語法（ないし撞着語法）と呼ばれているものであるが、後者の表現法は、とくに厳密に区別して、矛盾形容法と呼ばれている。<sup>1)</sup>

いずれにしても、その表現に共通する特徴はというと、その名称に含まれている矛盾という言葉が示しているように、並列された二個の言葉の意味内容が、相互に対立し矛盾しているということである。矛盾語法という訳語のもとになった原語は Oxymoron という言葉であるが、これはギリシャ語を語源とし、二個の形容詞 oxýs と mōrós とから成る合成語である。oxýs は scharf とか spitz といった意味を含んでおり、mōrós は dumm とか albern といった意味を含んでいる。このことからすれば、Oxymoron という言葉こそ、正しく、その言葉自体が、二個の相対立し矛盾する形容詞の並列ということになる。矛盾語法という訳語は、ギリシャ語の持っていた具体性を失ってしまっているものの、けだしその本質的特徴を言い得て妙である。

ところで、このような意味内容が相対立し矛盾する二個の言葉が並列されているということは、いくらその一つ一つの言葉の意味が明瞭であっても、全体として、その表現が何を意味しているのか明らかでなく、したがって、読者（聞き手も含む）も、その表現から作者の表現意図をはっきりとつかむことができないということになる。とすれば、このような表現は、人と人との間の意志疎通を一つの重要な目的とする言語表現として不適切であり、無意味であるということになる。しかし、実際には、このような表現は多くの人によってしばしば用いられ、時には「強い効果」<sup>2)</sup>をも生んでいるのである。トーマス・マ

1) ロベルト・シンチンゲル他、『現代独和辞典』、三修社、1293頁。修辞法の「撞着語法」の項参照。

2) 同上。

ンも、上に述べたように、この表現法を作品のなかでしばしば効果的に使っている。これらのことから推察すれば、読者においては、この表現法の特徴である矛盾は、既に矛盾でなくなり、読者はその表現から作者の表現意図をはっきりと読みとっているということになる。したがって、この表現法は言語表現の方法として何ら不適切でもなければ、無意味でもないということになるのである。

しかし、このようなことがどうして可能となるのであろうか。明白に矛盾している表現が読者においては全く矛盾でなくなるというが、一体そこにはどういうからくりがあるのであろうか。以下、この小論では、この表現法の特徴である矛盾に焦点を合わせながら、その矛盾の性格とか、その矛盾の止揚のされ方などを考察してみたい。それらが明らかになれば、トーマス・マンの初期短篇『トリスタン』（1903）における矛盾語法の意味も、おのずと明らかになるであろう。なお、最初に断っておくが、この小論はあくまでも一つの考察であるということである。

## (II)

『トリスタン』における矛盾語法の具体例をみる前に、この表現法の典型と思われる表現例について考えてみよう。その矛盾はどのような性格の矛盾であるのか、またそれほどのようにして止揚されるのか。

辞典には、この矛盾語法の典型的な表現例として、いくつかの例が出ているが、ここでは比較的その矛盾の姿がはっきりと現われていると思われる二つの例をみることにする。一つは「die armen Reichen」<sup>3)</sup> という例であり、もう一つは「alter Knabe」<sup>4)</sup> という例である。

まず、前者の例であるが、この名詞句の深層構造は「Die Reichen sind arm.」である。この深層構造にみられる、A連辞Bという言語形式は、一つの対象に対する一つの判断の結果を言い表わす形式でもある。とすれば、この表現例においては、「die Reichen」という対象に対して、それが「arm」であるという一つの判断の結果が言い表わされているということになる。しかし、この判断は形式論理からすれば明らかに矛盾している。なぜなら、「die Reichen」の「die Reichen」たる由縁は、そもそもそれが「reich」であるということにあるのであって、「die Reichen」が「arm」であるということは論理的にありえないからである。「die Reichen」という概念には「arm」という属性は含まれていないのである。このことは、「Reichen」という言葉が形容詞「reich」の転成した転成名

3) ロベルト・シンチンゲル他、『現代独和辞典』、三修社、1293頁。修辞法の「撞着語法」の項参照。

4) 佐藤通次、『独和言林』、白水社、「Oxymoron」の項参照。

詞であるということからも推察されよう。しかるに、この表現例においては「Die Reichen sind arm.」、すなわち「Die Reichen sind nicht reich.」と表されているのである。形式論理学では「Aが非Aである」あるいは「Aであると同時に非Aである」というとき、その判断は矛盾していると言う。<sup>5)</sup>

次に、「alter Knabe」という例であるが、これも上例にならって、その深層構造で考えるとすれば、この例においても「Knabe」という一つの対象に対して、それが「alt」であるという一つの判断の結果が言い表わされている。しかし、この判断もまた、形式論理からすれば、明らかに矛盾していると言える。なぜなら、「Knabe」の「Knabe」たる由縁は、そもそもそれが「jung」であるということにあるからだ。つまり、「jung」は「Knabe」という概念の主要な属性であり、言い換えれば「Knabe」と「jung」とは類意語なのである。しかるに、この表現例においても、「Knabe ist alt.」、すなわち「Knabe ist nicht jung.」と表されているのである。

以上の二例から察するに、典型例における矛盾とは、形式論理的な矛盾ではなからうかということである。このような性格の矛盾を含みながらも、先程も述べたように、この表現法は多くの人によって広く用いられている。つまり、その表現法による表現を読み、聞く人においては、その矛盾は何らかの形で止揚され、既にその矛盾は矛盾でなくなってしまうのである。では、どのようにして、読者はこの矛盾を止揚するのであろうか。次に、これを見よう。

結論を先に言えば、読者は、実際に表現されている「arm」とそれが付されている名詞の属性と考えられる「reich」、あるいは、同じく実際に表現されている「alt」と属性として考えられる「jung」というそれぞれ矛盾する二語を、同一の意味の意味領域に属する言葉とみていないのである。例えば、前者の「die armen Reichen」という例であるが、読者は、前の「armen」という言葉を見たとき、瞬間的に、その言葉が本来意味する金銭的・経済的にネガティブな状況を思い浮かべる。そして、続いて、読者は「Reichen」という言葉を目にするが、その言葉からも、先の言葉と同様の金銭的・経済的な領域におけるポジティブな状況を思い浮かべるのである。しかし、そのように二語とも、同じ意味領域における状況を思い浮かべたのでは、その二語の意味内容は、先程もみたように形式論理的に矛盾してしまう。なぜなら、一方の言葉は同一意味領域でのネガティブな状況を表わすものであり、もう一方の言葉は同一意味領域でのポジティブな状況を表わすものであるからだ。したがって、その表現が全体として何を意味しているかがわからなくなってしまうのである。そこで、読者は、その矛盾に気付くや否や、咄嗟の間に、文派とか場面の

5) 『哲学辞典』, 平凡社, 1159頁。「矛盾」の項参照。

様子を考慮しながら、もういちど二語の意味内容を比較検討し、最終的には前の「armen」の方を、その言葉の第一義である金銭的・経済的な意味から、転義的な意味である人間的・精神的な意味に解釈し直すのである。このようにして矛盾は止揚され、この表現は「心の貧しい金持ち」といった意味に落ち着くのである。

もう一つの典型例「alter Knabe」の場合も、上と同様の操作を行うことによって、読者はその矛盾を止揚するものと考えられる。すなわち、前の言葉「alter」を、その言葉の第一義である生理的年令という意味から、精神的年令という転義的な意味に解釈し直すのである。

いずれの場合も、以上のようにして、その表現の形式論理的矛盾は止揚されるものと考えられるが、しかし、その矛盾が止揚される間、それまでスムーズに流れていた思考のリズムは一時狂わされる。この思考のリズムの狂いこそ、この表現を多くの読者に強く印象づける原因と考えられる。また、読者は、この表現の矛盾を止揚すべく、様々な視点から対象を眺めることになるが、そのことが読者をして対象を深く立体的に認識させるのである。この矛盾語法が、古来「強い効果」を生む表現法として、多くの人から珍重されてきたとしたら、その理由の一端はこの辺にもあると思われる。

### (Ⅲ)

以上の叙述でわかったことは、典型例における矛盾とは、二語の第一義が同一の意味領域にあり、そこにおいてお互いに反対語をなしているということから生じた形式論理的矛盾であるということであった。したがって、その矛盾を止揚するのも、その二語のうちどちらかの言葉を、異なる意味領域に属する言葉として、転義的な意味に解釈し直せば、それで事足りたのであった。このことを念頭におきながら、次に、トーマス・マンの初期短篇作品『トリスタン』における矛盾語法の具体例をみよう。その矛盾はどのような性格の矛盾か。また、それはどのようにして止揚されるのであろうか。

この作品には、矛盾語法による表現と考えられる表現がいくつかあるが、ここではそのうちの一つである「eine unwissende und tüchtige Stütze des Staates」<sup>6)</sup>という表現について考えてみよう。この表現は、この作品の主人公の一人であるジュピネルが、これまでこの作品の主人公の一人であるクレーターヤーン氏に宛てた手紙のなかで、氏の息子アントンを表した言葉である。

ところで、この表現においては「Stütze」という一個の名詞に対して「unwissend」と「tüchtig」という二個の形容詞が付されている。果して、この二語の矛盾関係はどのよ

6) Thomas Mann, Gesammelte Werke, S.Fischer, Bd. 8., S.254.

うなものであるか。

まず読者は「unwissend」という言葉を目にしたとき、その言葉からすぐに知識量が乏しい状態とか、物事を理解する能力が欠如せる状態を思い浮かべる。そして、それに続いて、読者は「tüchtig」という言葉を目にするが、その言葉からはすぐにある者が仕事において有能であるとか、物事の役に立つといったことを思い浮かべるのである。簡単に言えば、読者は前の言葉から知的能力の領域におけるネガティブな状態を想像し、後の言葉からは現実的能力の領域におけるポジティブな状態を想像するのである。

ところで、この知的能力および現実的能力という二つの能力は、いずれも人間の能力であるということには変りはないから、この二語は、人間的能力というより広い一つの意味領域に包括されると言えなくはない。しかし、この二つの能力は人間活動の質的に異なる二つの領域における能力であるから、そのことからすれば、やはりその二つの能力を言い表わすこの二つの言葉も、質的に異なる意味領域に属する言葉とみるべきである。とすれば、この二語は第一義から意味領域を異にしているということになる。したがって、もし二語が矛盾しているとしても、その矛盾の仕方は、先にみた二語の第一義が同一の意味領域にあった典型例の場合と、少し異なるのではないかということが予想される。仮に、典型例のような矛盾の仕方をこの場合にも当てはめるとするならば、「unwissend」に対しては、その反対語である「wissend」が対置されていなければならない、また一方の「tüchtig」に対しては、その反対語である「untüchtig」が対置されていなければならないのである。しかし、ごらんのように、この表現ではそのようになっていない。では、一体、この二語の矛盾はどのような意味の矛盾なのであろうか。そもそも、この二語は矛盾しているのであろうか。

結論から言えば、やはりこの二語も矛盾していると言える。先程も述べたように、読者は前の言葉から知的能力の領域におけるネガティブな状態を想像するが、そのイメージが消えないうちに、次の現実的能力の領域におけるポジティブな状態を表わす言葉を目にする。ふつう、その時一瞬、読者は奇異な感じに襲われるはずである。というのは、一般的・常識的に考えれば、知的能力の領域においてネガティブなものは現実的能力の領域においてもネガティブなものであるはずだし、逆に、現実的能力の領域においてポジティブなものは、全てとは言わないまでも大抵の場合、知的能力の領域においてもポジティブなものであるはずであるからだ。つまり、読者は「unwissend」を基準にすれば、その言葉と関連して「untüchtig」という言葉が連想されるはずであり、逆に、「tüchtig」を基準にすれば、これまたその言葉と関連して「wissend」という言葉が連想されるはずである。しかるに、実際には、各々その逆の言葉が表現されているのである。そこにこそ、この表現が一瞬、読者に奇異の念を抱かせる原因があるのであろう。

以上のことから推理すると、この表現の矛盾は、一般的・常識的な考え方に従って連想した「untüchtig」ならびに「wissend」という頭の中の言葉が、実際に表現されている「tüchtig」や「unwissend」という言葉と逆になっているということから起った、いわば媒介的・間接的の矛盾と言えよう。媒介的であれ、間接的であれ、矛盾は矛盾である。したがって、『トリスタン』におけるシュピネルの表現もまた、矛盾語法の一つであると言って差支えないのである。

さて、『トリスタン』のこのような矛盾はどのようにして止揚されるのだろうか。

既に典型例のところでお気づきかと思われるが、矛盾が生じた原因と、その止揚の仕方との間には密接な関係がある。すなわち、繰り返しになるが、典型例の場合は、矛盾の原因は二語の第一義が同一の意味領域にあるということにあった。したがって、その矛盾の止揚の仕方も、その二語のどちらか一方を意味領域を変えて転義的に解釈すればよかった。しかし、このシュピネルの表現の場合は、矛盾の原因はそのようなところになかった。いま検討したように、二語の第一義は異なる意味領域にあったのであり、その矛盾は、各々連想によって脳裡に浮かんだ二語を媒介としての間接的な矛盾であったのである。言い方を換えれば、二語の矛盾関係は、典型例における各々の二語の矛盾関係ほど必然的ではなく、また絶対的でもなかったのである。したがって、シュピネルの表現の矛盾は、時と場合によっては、何ら矛盾でなくなるということがある。そもそも、この表現の矛盾は、二種類の意味領域の間で、一般的・常識的な考え方に従って、いわば価値を平行移動させることによって生じた矛盾であったのだ。そこにこの矛盾の原因があったのである。とすれば、この矛盾の止揚の仕方もおのずと決ってくる。つまり、二種類の意味領域の間での価値の平行移動を、一般的・常識的な考え方に従って行なわなければよいのである。すなわち、この表現の矛盾は、一般的・常識的な価値観と価値観を全く逆にする特殊世界においては、矛盾でなくなるのである。その特殊世界においては、この表現は極く自然な当り前の表現となる。

ところで、その特殊世界は『トリスタン』という作品の世界であり、とりわけこの表現の発話者シュピネルの主観的世界である。この一般的・常識的な考え方の通用しない特殊世界を理解することなしには、この表現の矛盾は止揚されないだろう。次にそれをみよう。

#### (Ⅳ)

『トリスタン』という作品には三人の主要人物が登場してくる。いま問題にしているシュピネルはもちろんその一人であるが、残りの二人はクレーターヤーン夫妻である。この三人を人間的質という点から眺めると、シュピネルとクレーターヤーン氏は全く質を異にし、この作品の世界の両極に位置している。その中間にクレーターヤーン夫人が立っているの

であるが、しかし、中間に立っているといっても、それは新たな第三の極を意味するものでなく、夫人はただ対立する両者の人間的気質を同時に併せ持っているだけである。彼女はその意味で、いわば分裂的な二元的人間と言える。しかし、もう少し厳密にみれば、夫人の位置は、はるかにシュピネルの方に近く、サナトリウムに来て以来、ことにシュピネルと逢う瀬を楽しむようになってからは、急速にシュピネルに感化され、最後にはほとんどシュピネル的人間になってしまっているのである。したがって、この作品の世界にはシュピネル的人間とクレーターヤン氏の人間という二種類の特異な人間的タイプが登場してくることになる。この両タイプは、いればトーマス・マンの作品にお馴染みの芸術家的タイプと市民的タイプであるが、この両者がぶつかり合い、絡み合うことによって、この作品の特殊世界が形成されているのである。

少し先回りをすぎたようだ。ここでは、『トリストラン』という作品の特殊世界、ことにシュピネルの主観的世界をみるのであるが、それをよりはっきりとさせるためにも、そのシュピネルと対立する人物クレーターヤン氏の主観的世界をも併せてみておく必要がある。ことに、上にみたシュピネルの表現が、この作品では余り詳しく描かれていないアントンに対してなされているということを考え併せれば、そのことはなおのこと必要となる。アントンという人物は、父クレーターヤン氏の「低級な存在の延長」<sup>7)</sup>であり、その諸特性を純粹培養したような同質的人物であるのだ。

まず、そのクレーターヤン氏からみて行こう。ここでは、その本質を雄弁に物語っているとされる象徴的な出来事を、二・三みることにする。彼は何といても豪商である。その職業からすれば当然のことであるが、彼にとってこの世で最も価値のあるものは金である。例えば、彼は病妻に付き添ってサナトリウムにやってくるという破目に陥るが、一週間ばかり滞在して、妻が十分な看護を受けていると見届けるや否や、そそくさと下山してしまふ。理由は言うまでもなく「同じ重要性を持った義務」<sup>8)</sup>の商売に戻るためである。この場合はまだいい。いくら病妻のためとは言え、そういつまでも商売を放っておくことは出来ないからである。しかし、次の場合はよくない。夫人はしばらくして急に容態が悪化し、危篤状態に陥るが、クレーターヤン氏はそのことを遠回しに知らせる電報を受けとって、急いでサナトリウムにやってくる。彼はサナトリウムに着くや否や、次のように言うのである。「わしはわしの金が大事なんだからね、あんた、この頃は不景気だし汽車賃は高いし……………」<sup>9)</sup>いくら事情を詳しく知らされていないとは言え、病妻のところから子供も一諸に連れてこいという趣旨の電報を受け取ったなら、その電報がどうい

7) Ebenda.

8) Ebenda, S. 223.

9) Ebenda, S. 249. (実吉捷郎訳)

ことを意味しているかぐらひは察しがつきそうなものである。それなのに、このような言葉をいきなり吐くとは、よほど彼という人物は神経の鈍感な人間なのだろう。

このような彼からすれば、全く当り前のことかもしれないが、彼は現世的な楽しみを享樂することにかけては人一倍である。例えば、彼の食欲だが、シュピネルから「口のおごった呑百姓」<sup>10)</sup>と仇名されるほど旺盛である。妻の死を意味する電報を受け取り、サナトリウムにやってきたときですら、到着するとすぐにコーヒーとバターパンを求めているのである。また女性を享樂することにかけても、決して控え目ではない。あるとき、事もあろうに妻の逗留しているサナトリウムの廊下で、女中とかなり怪しからぬやり方でふざけ合っている。このことを目撃したシュピネルの咎に対しても、何ら反省の色がうかがえず、それどころか居直ってさえているのである。

このような諸特性から判断すれば、いかに彼が生活力の豊かな、しかしその反面、神経の全く鈍感な現実主義的の人間であるかがよくわかるだろう。彼は倫理的にも少しおかしいのである。豪商ということを考え併せれば、つまるところ彼は拜金主義的なブルジョワ的俗物と言えよう。

次に、シュピネルをみてみよう。彼は文士である。文士といえども、いちおう芸術家であることに変わりはないから、美に対して非常に敏感である。しかし、彼の美に対する敏感さは常識を外れており、異常である。美に触れ、美に感動すると、彼は忘我の状態に陥り、何が何だか前後の見境がつかなくなってしまう。例えば、高雅な形の花瓶とか、落日に赤く輝く連山などをみると、非常な感動におそわれ、それが男であれ女であれ、非常に位の高い人であっても、その首っ玉にもかじりつきかねないのである。すなわち、彼の眼中にあるのは、ただ美のみであって、その美のためには無味乾燥な現実などなくもがなである。例えば彼の美人の観察方法だが、彼は美人の姿を横目でちらっと掠め見るだけである。それで充分だというのである。美人の淡い影によって彼の空想は強く刺激され、心の中に、現実の美人もはるか及ばないような完璧な美人像を思い浮かべることができるのである。このような美のためにする現実否定は、夫人の美しさに触れたとき最高に達する。その時、事実と空想の世界とは逆転し、空想の世界こそ彼にとっては真の世界となる。すなわち、彼は、夫人から、彼女が6人の女友達と噴水のほとりで庭椅子に座り歓談していたという話を聞くが、実際はただそれだけなのに、その話を聞いたシュピネルは、その時の夫人が女王のようであり、彼女の頭には金の冠が光り輝いていたと言い張り、彼女が否定するのも聞かず、そう信じ込んでしまうのである。後に、このことで、彼は夫人の良人クレーターヤーン氏と口論することにもなるのである。

10) Ebenda, S. 252. (実吉訳)



ところで、このような彼が現実生活において無能なことは、火をみるより明らかである。彼自身もそのことをよく自覚している。彼は次のように言う。「……わたしは役立たずなのですよ、わたしや、わたしみたい連中はね……わたしは役に立つものを憎みます。そういうものが賤しく醜いということを知っています……」<sup>11)</sup>

これらの外にも、彼にはいくつかの奇矯な言動がみられるが、その一つに、彼が非常に朝早く起きるといことがある。彼はその早起きについて、その理由を次のように説明する。彼は、人生観とか仕事の方法、すなわち内面生活の全体が恐ろしいほど不健全なため、せめて外面的な生活ぐらい厳格に律してゆかないと、内と外とのバランスをとることができない。彼は、早起きだけでなく、時には冷水浴をしたり、雪の中を散歩したりするが、そのようにすると、まあ一時間ぐらいは自己に安んじていられるというのである。

以上のような諸特性からすると、シュピネルという人物は、美に対する感受性は異常なまでに鋭敏であるが、しかし、現実的生活においては全く無能である唯美主義的人間ということになる。いわゆる内面ばかりが異常なまでに肥大したデカダンの芸術家なのである。

#### (V)

上のところで、シュピネルとクレターヤーン氏というこの作品の主要人物の人物像を粗描した。それから容易に察せられると思うが、既にのべたように、両者は人間的質および住む世界を全く異にしている。そのちがいは月とスッポン、天と地ほどのひらきがある。その違いを図式化すれば、一方が美の支配する唯美的芸術の世界にのみ生の根拠をもつ人間だとすれば、他方は、その逆の金の支配する経済的世界にのみ生の根拠を持つ人間である。さらに言えば、一方が外面的生活において全く無能な観念的人間だとすれば、他方は、内面的生活の全く貧しい現実主義的人間である。この両者の関係は、比喩的に言えば、一枚の銅貨の表と裏との関係である。

ところで、このようにシュピネルとクレターヤーン氏は全く正反対の人間として描かれているのであるが、そのことは、この作品においては、彼らが生の根拠としている美的・知的領域と経済的・現実的領域とが対立的に捉えられているということでもある。したがって、この作品においては、その二つの領域が対立的に捉えられていない一般的・常識的考え方のように、価値を平行移動させることはできない。なぜならば、二つの領域が対立している場合、価値の関係は全く逆になるからである。すなわち、美的・知的領域におけるポジティブなものは経済的・現実的領域においてネガティブなものとなり、逆に、ネガティブなものはポジティブなものになるのである。具体的に言えば、なまじっか美がわか

11) Ebenda, S. 229. (実吉訳)

り、人間的なことに敏感で知識のあるものは、現実生活においてそれが禍し、人を欺き、人を搾取してまで金儲けは出来ず、したがって、無能者という烙印を押されることも甘受せざるを得ないのである。美がわかり、商売以外の余計な知識があるということは、必ずしもよいとは限らないのである。このような観点からシュピネルの表現を眺めてみると、その表現にある「unwissend」なものほど「tüchtig」であるという考え方は、何らおかしい考え方でなく、むしろ自然な考え方であるとすら言える。つまり、シュピネルの表現には全く矛盾は存在しないのである。

以上のように、シュピネルの表現における矛盾は、作品という特殊世界において眺めたとき、全く矛盾でなくなる。無論、一般的・常識的には矛盾と思われたものを、矛盾と感じさせなくするには、言いかえれば、そのような特殊世界の特殊性を自然であるとして読者に感じさせるには、作者の表現力が非常に優れたものでなければ不可能である。しかし、いくら作者に表現力があり、その表現に説得力があるからといっても、その特殊世界に何らかの真実がなければ、読者をそこまで引っぱってゆくことは難しいと思われる。ではそのような真実とは一体何か。またそのような真実は一般的・常識的な考え方とどのような関係にあるのか。このような問題が次に問われるべきであるが、ここでは問わないことにする。他日、稿を改めて論じてみたい。

最後に、この矛盾語法の作品における意味について考えておこう。この論文の冒頭で、トーマス・マンは一個の名詞に対して二個の形容詞を付していると述べたが、単に二個だけでなく、トーマス・マンは、一つの対象に対していくつもの形容詞を連ねて付すという技法をよく用いている。それは、トーマス・マンが一つの対象を様々な角度から眺め、その印象や認識の結果を克明に細かく描写するという細密画的描写手法をとっているため、生まれた技法であろう。トーマス・マンはこの技法をことに人物の描写によく用いているが、それは理由のないことではない。事物に比べて、人間はふつう複雑な性格を有しているものであり、また外貌といえど、視点のとりようによっては、いく様にもみえるものであるからだ。その複雑さ、多様さをできる限り克明に細かく描こうとすれば、勢い、その人物を眺める視点も多くなり、またそれに対応する形容詞の数も多くならざるを得ない。しかし、そうだからといって、それらの数を無制限にふやしてよいかというと、決してそういうことにならない。それらの数は、おのずと、その場面の具体的な状況や雰囲気、なによりも表現効果という文学作品の至上命令によって制限されるのである。

ところで、人物像が詳しく克明に描かれるということと、その人物の本質が全体的に描かれるということとは根本的に違う。人物の些末な部分がいくら詳しく克明に描かれていようと、それはその人物の本質を全体的に表現したことにはならない。全ての視点が、またそれに対応する全ての形容詞が等しく、一様に人物の本質をみることのできる視点であ

ったり、あるいはそれを表す言葉であったりするということはないのである。

では一体、どのような視点、どのような種類の形容詞が本質的な視点、本質的な形容詞であると言えるか。この問題は、作品の世界がどのような構造をもっているか、ということと密接に関係してくる。もし作品に、二人の人間の質を異にし、住む世界を異にする主人公が登場してくる場合、言いかえれば、その作品の世界が二極構造をなしている場合、その本質的視点は二つであり、本質的な形容詞は二種類の意味領域の異なる形容詞ということになる。もちろん、三極構造の場合は各々三つということになる。たとえば、二極構造の場合であるが、その作品に登場してくる作中人物は、各々二つのお互いに質の異なる極から色のちがうスポット・ライトを浴びせかけられ、その像を立体的に浮かび上がらされるのである。もう少し厳密に言うと、主人公の場合、彼らはもともとどちらかの極に立っており、その意味では最初から固有の色をもっているのであるが、作品の中では、必ずそれと対立するもう一方の極から色の違ったライトをあてられ、それらの二つの色が交叉するなかで、その本質的な全体像が立体的に浮かび上がらされるのである。因に言えば、教養小説の場合はこれと少し異なり、主人公は普通どの極にも立っておらず、したがって、その意味では無色透明であるが、やがて彼が社会に出て多くの人と深く交わり、彼らと密接な関係を持つことによって、それらの人たちの多くの色に複雑に染め上げられてゆくのである。このことからすれば、教養小説の場合、主人公が深く交わり、密接な関係を持つ人の数だけ本質的な視点、本質的な形容詞があるということになる。

ところで、この『トリスタン』という作品の場合、上にみたように、その世界は唯美主義的領域と現実主義的領域という二つの質の異なる領域からなっている。したがって、一人の人物をみる本質的な視点は二つであり、その本質的な形容詞も二種類の意味領域の異なる形容詞ということになる。具体的に、一つの例で言えば、既にみてきたシュピネルのアントンに対する表現がそれであるが、シュピネルは、アントンという人物を唯義主義的領域ないし現実主義的領域という二つの対立する領域から眺めている。その結果、唯美主義的領域から眺めて「unwissend」という形容詞が生まれ、また彼の固有の領域である現実主義的領域から眺めて「tüchtig」という形容詞が生まれたのである。たまたま、この作品では、この二つの領域が全く対立的に捉えられているため、それらを対立的に捉えない一般的・常識的な考え方からすれば、その表現は矛盾を含んでいると見たのである。

それはともかくとして、以上のことからすれば、『トリスタン』におけるシュピネルの表現は、作品の世界を形成している二つの本質的な領域の対立関係を象徴的に表現していると言える。したがって、その表現の意図を充分に理解するためには、言い方をかえれば、その表現に仕組まれた矛盾を止揚するためには、読者は作品の世界の根本的構造を深く理解しなければならない。その意味で、このシュピネルの矛盾語法による表現は、その矛盾

が一瞬、読者の思考のリズムに狂を与えることによって、読者にその作品の世界の根本的構造を深く考えさせ、立体的に認識させるという効果をもつのである。